

## サウルの敵意の中で

(サムエル18・1〜16)

1節をご覧ください。〈ダビデがサウルと語り終えたとき、ヨナタンの心はダビデの心に結びついた。ヨナタンは、自分と同じほどにダビデを愛した。〉と書かれています。私たちの人生には予測のできないことがたくさんあります。

その一つに、惚れ込むという感情があります。惚れ込むとは、何かの形で「心の琴線にふれる」ことです。サウル王の息子であり、王位継承者でもあったヨナタンはダビデに惚れ込んでしまいました。男と男の友情が生まれました。自分はどうなってもいいから、この人を大切にしたいという思いが生まれしました。一方、ヨナタンの父サウルもダビデをたいそう気に入りました。2節です。

〈サウルはその日、ダビデを召しかかえ、父の家に帰らせなかった。〉と。サウル王は少年ダビデの勇敢な振舞いに、愛情を持ったのだと思われまます。さて、再びヨナタンですが、ダビデと契約を結んだと記されています3節です。〈ヨナタンは、自分と同じほどにダビデを愛したので、ダビデと契約を結んだ。〉とあります。〈契約〉と書かれていますから、主の前に契約を結んだという可能性が高いです。ヨナタンはダビデを尊敬し、

主の前にダビデに誠実を尽くすことを誓ったのでありましよう。それは、ダビデと同じでした。ダビデは生涯にわたりヨナタンとの契約に誠実に生きました。ヨナタンは、ダビデに、次期イスラエルの王となつてほしいと願っているような行動をしています。4節です。〈ヨナタンは、着ていた上着を脱いで、それをダビデに与え、自分のよいかぶと、さらに剣、弓、帯までも彼に与えた。〉とあります。ここに書かれている〈上着よるかぶと、剣、弓、帯〉は王子の持ち物ですから、それをダビデに渡した、と読むことができます。

さて、ダビデはペリシテ人との戦いのために出陣するたびに、多くの手柄を立てて戻ってきました。ですから、兵士たちにも、サウル王の家臣にも喜ばれました。それが5節です。〈ダビデは、どこでもサウルが遣わす所に出て行って、勝利を収めたので、サウルは彼を戦士たちの長とした。このことは、すべての民にも、サウルの家来たちにも喜ばれた。〉とあります。そうしますと、当時の習慣により、女性たちが楽器をかなで、踊り歌いながらサウル王を迎えました。6節です。〈ダビデがあひのペリシテ人を打つて帰つて来たとき、みなが戻つたが、女たちはイスラエルのすべての町々から出て来て、タンバリン、喜びの歌、三弦の琴をもって、歌い、喜び踊りながら、サウル王を迎えた。〉よくご

覧ください。女性たちが迎えたのは、ダビデではなくサウル王でした。女性たちは、歌いました。7節です。〈女たちは、笑いながら、くり返してこう歌つた。「サウルは千を打ち、ダビデは万を打つた。〉女性たちに、サウル王をさげすむ思いはありませんでした。ところが、女性たちの歌がサウルの耳に届くと、サウルは激怒してしまいました。8節です。〈サウルは、このことばを聞いて、非常に怒り、不満に思つて言つた。「ダビデには万を当て、私には千を当てた。彼にないのは王位だけだ。〉と。これは、サウルの持つて生まれた気質とその後の環境による性格なのでありましよう。行間を読むことになりませんが、ひよつとすると、小さいときに受けた心の傷があつたのかもしれない。ですが、サウルは理性的に分析しています。〈彼にないのは王位だけだ〉と。この出来事以来、サウルはひとりの人間として神の御思いに背を向けることにより、さらに悪い状態になりました。9節です。〈その日以来、サウルはダビデを疑いの目で見えるようになった。〉とあります。人をねたむのは神の御思いに背を向ける行為です。すなわち、罪です。結果、罪のゆえに悪霊現象にさいなまれるようになりました。10節です。〈その翌日、わざわいをもたらす、神の霊がサウルに激しく下り、彼は家の中で狂いわめいた。ダビデは、いつものように、琴

を手にしてひいたが、サウルの手には槍があつた。〉本来のサウルではない悪霊に圧迫された状態です。悪霊に圧迫されていたと言いましても、もちろん本人の中には自分の意志が残つています。新約聖書に登場する、悪霊に取り憑かれた人レギオンのような状態です。ここまで来ると、ダビデの立琴による演奏もつてしても、サウルを慰めることができせん。何せ、自分がねたみの奴隷になつて原因をつくり出したダビデがそばにいるからです。ほんとうは自分自身の罪が元凶なのですが、11節をご覧ください。〈サウルはその槍を投げつけた。ダビデを壁に突き刺してやろう、と思つたからである。しかしダビデは二度も身をかわした。〉と書かれています。

人生においては、いつどのようなときに身近な人が、あるいは自分自身に精神的バランスを崩してしまうか、私共には予測ができません。ですが、神は私共の思うところを超えて、必要な人を備えておられます。サウルにとつてはダビデがそうでした。サウルが自分のねたみに気づいた段階で、早めに罪を処理できたら、あのような不幸な状況にはなりませんでした。

主を見上げ、主に信頼するなら、たとえ追い詰められた状況になつても、道は開かれます。なぜなら、父・子・聖霊なる神の御意思だからです。